

「ソーシャルディスタンス」の時代のエスノグラフィー  
——デジタルプラットフォームを活用した調査を事例として——

照山 絢子\*, 木村 周平†, 飯田 淳子‡, 堀口 佐知子§  
春田 淳志\*\*, 濱 雄亮\*\*, 金子 惇‡‡, 宮地 純一郎§§  
小曾根 早知子\*\*\*, 後藤 亮平†††

Ethnography in the Age of “Social Distancing”:  
A Case of a Project Utilizing Digital Platforms

TERUYAMA Junko, KIMURA Shuhei, IIDA Junko, HORIGUCHI Sachiko,  
HARUTA Junji, HAMA Yusuke, KANEKO Makoto, MIYACHI Junichiro,  
OZONE Sachiko, GOTO Ryohei

Abstract

The worldwide pandemic of COVID-19 in 2020 has had a tremendous impact on academic

- 
- \* 筑波大学図書館情報メディア系 ; Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba, 1-2 Kasuga, Tsukubashi, Ibaraki, 305-8550, Japan / e-mail: teruyama@slis.tsukuba.ac.jp  
† 筑波大学人文社会系 ; Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba 1-1-1 Tennodai, Tsukubashi, Ibaraki, 305-8575, Japan / e-mail: shuhei.kimura@gmail.com  
‡ 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 ; Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare, 288 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0193 Japan / email: iida@mw.kawasaki-m.ac.jp  
§ テンプル大学日本校学部課程 ; Undergraduate Program, Temple University, Japan Campus, 1-14-29 Taishido, Setagaya-ku, Tokyo, 154-0004, Japan / e-mail: sachiko.horiguchi@gmail.com  
\*\* 慶應義塾大学 医学部 ; School of Medicine, Keio University, 35 Shinanomachi, Shinjuku-ku, Tokyo, 160-8582, Japan / e-mail: junharujp@keio.jp  
†† 東京交通短期大学 運輸科 ; Faculty of Transport, Tokyo College of Transport Studies, 2-5-15 Ikebukurohoncho, Toshima-ku, Tokyo, 170-0011, Japan / e-mail: y-hama@toko.hosho.ac.jp  
‡‡ 横浜国立大学医学群ヘルスデータサイエンス専攻 ; Department of Health Data Science, Yokohama City University, 22-2, Seto, Kanazawa-ku, Yokohamashi, Kanagawa, 236-0027, Japan / e-mail: kanekom@yokohama-cu.ac.jp  
§§ 北海道家庭医療学センター 浅井東診療所 ; Azaihigashi Clinic, Hokkaido Centre for Family Medicine, 828 Nose, Nagahamashi, Shiga, 526-0203, Japan / e-mail: j.miyachi@hcfm.jp  
\*\*\* 筑波大学医学医療系 ; Faculty of Medicine, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukubashi, Ibaraki, 305-8575, Japan / e-mail: sachiko-ozone@md.tsukuba.ac.jp  
††† 筑波大学医学医療系 ; Faculty of Medicine, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukubashi, Ibaraki, 305-8575, Japan / e-mail: goto-r@md.tsukuba.ac.jp

research. Those of us who are engaged in ethnographic research, in particular, have suffered greatly from the lost opportunities of entering our field sites, encountering and speaking with informants, or even simply spending time with them. Physical presence has always been an integral part of doing ethnography, but in this milieu, we are being pushed to reconsider this premise and to explore and examine alternative modes of research more appropriate for the age of “social distancing.” This paper is based on an interdisciplinary team project consisting of anthropologists and medical professionals to interview primary care physicians who are working at the frontlines in dealing with COVID-19 in Japan. The project was launched in March 2020 in the midst of the pandemic, and all the interviews as well as their arrangements, feedbacks, reflections and analyses have taken place online, utilizing digital platforms. We examine the implications of conducting an ethnographic project entirely online, discussing the problems and issues raised along the process, as well as some of the creative and imaginative ways in which we took advantage of the virtual tools. We argue that such projects should not be considered a mere substitute for “real” ethnography, but as a meaningful and reflexive exploration of our research methodology.

キーワード：デジタル空間，デジタルエスノグラフィー，方法論

**Keywords:** Digital space, Digital ethnography, Methodology

## はじめに

2020年に入り、世界各地で新型コロナウイルスが猛威をふるう中で、大学の研究活動にも大きな影響が出ている。とりわけ、「ソーシャルディスタンス」が「ニューノーマル」とされる中で、人々と出会い、その人々と多くの時間をともに過ごすフィールドワークや、その中で実践される、必ずしも構造化されないインタビューを通して彼ら・彼女らの文化に接近しようとしてきたエスノグラフィーにおいては、調査の方法論をめぐる大きな転換の必要性に直面しているといえる。

本稿では、国内で新型コロナウイルスの感染が拡大していた2020年3月から8月にかけて、文化人類学者と医療者の計10名のチームで実施したオンラインインタビュー調査を事例として取り上げ、対面によるエスノグラフィーに代わってオンラインで調査を実施するにあたってなされた工夫や表出した課題などを明らかにする<sup>1)</sup>。

---

1) この調査は当面継続の予定であるが、本稿では2020年8月までに実施された部分を対象として論じる。

## I 理論的枠組み

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、エスノグラフィーを実践する研究が困難に直面していることは、既に指摘されている [Fine and Abrahamson 2020; Parry 2020]。こうした状況下で、従来型のエスノグラフィーにとってかわる、代替的な調査方法を模索し、クラウドで共有する [Lupton 2020] といった取り組みも始められており、出版までに時間のかかる学術論文に限らず、ブログや YouTube といった動画共有サイトなど、スピード感のあるツールを用いて多くの研究者らが議論を重ねているところである [Miller 2020]。

こうした一連の議論の中で特に注目を浴びているのは、新型コロナウイルスの感染拡大以前から確立されていた、デジタルエスノグラフィーという手法である<sup>2)</sup>。デジタルエスノグラフィーはかねてより、従来型の対面的なエスノグラフィーの手法をオンライン空間に応用することで、オンラインで人々がどのように繋がり、集団を形成し、独自の文化を育むのかを明らかにするとともに [Boellstorff 2015; Hine 2000; Boyd 2014]、そうした調査に伴う倫理的課題や方法論の問題についても論じてきた [Hine 2015; Kozinets 2015; 小川 2019]。このように先んじてデジタル空間を調査フィールドとみなしてきた領域の知見から学ぶことは、コロナ禍において新たにオンラインでフィールドワークやインタビュー調査をしようとする研究者らにとって確かに有益であろう。

一方で、デジタルエスノグラフィーはオンラインで既に形成されている人間関係や集団を調査対象としており、そうした対象を「正統な文化的フィールド」 [Boellstorff 2015: 61] とみなすことで成り立ってきた方法でもある。つまり、オンライン空間は現代社会の重要な一側面を形成しているばかりでなく、それ自体として調査対象にできるような文化圏を無数に擁しているということが前提となっている。こうした視座は、今回のコロナ禍において実施されている／されようとしている、オンライン上での調査に必ずしも馴染むとは限らない。本稿で取り上げるオンラインでのインタビュー調査もまた、以下にあげるようないくつかの点において、デジタルエスノグラフィーとはやや異なる趣向を持っている。(1) 調査対象者らは、調査メンバーとオフラインでの面識がある者のみで、オンライン空間で新たな知り合った者に調査協力を依頼するというかたちを行っていない。(2) 調査対象者らがオンライン上で一つのコミュニティを形成しているという実態はなく、プライマリ・ケア医というオフラインの属性に基づいて本調査にご協力いただいた。(3) インタビュー内容はその主要な部分

2) オンライン空間を調査対象とするエスノグラフィーとして、デジタルエスノグラフィー、デジタル人類学、サイバーエスノグラフィ、バーチャルエスノグラフィーなど、さまざまな呼称のものがあるが、ここでは便宜上、こうした一連の手法を総称してデジタルエスノグラフィーと呼ぶこととする。それぞれの呼称によって括られる研究の相違と関連性については木村 [2018] が詳しい。

がオフラインの医療現場で起こっていることに関するもので、オンラインについては情報探索行動に関する質問が限定的になされたにとどまっている。

したがって、本稿で取り上げるプロジェクトは、デジタルエスノグラフィーではなく、あくまでも「デジタルプラットフォームを用いたエスノグラフィー」ということになる。残念ながらこのように限定的な形でデジタル技術を活用するエスノグラフィーについての先行研究は多くない。ICTが広く社会に浸透していく中で、今後エスノグラフィーにおけるデジタル技術の活用にはこれまで以上にさまざまな形態が生まれてくると考えられるが、その一つの形態である、「デジタルプラットフォームを用いたエスノグラフィー」の実践について記述することで、その意義やなしうる工夫、表出した課題について整理することが本稿の目的である<sup>3)</sup>。

なお、インタビューに基づいている本プロジェクトを「エスノグラフィー」と称する意図についても補足しておきたい。エスノグラフィーにおいては、参与観察がその中心的な方法とされ、インタビューが周縁的位置に追いやられてきたことはこれまでも指摘されてきた [Forsey 2010]。しかし他方では、エスノグラフィーにおけるインタビューを、単に調査対象者があらかじめ持っている情報を引き出すために方法とみなすのではなく、調査者と調査対象者が対話を通して弁証法的に知を生み出す共同作業に携わるという点で、参与観察とその姿勢を一にするものであるということも指摘されてきた [Tedlock 1991]。さらには、参与観察を行う「フィールド」は実在する空間とは限らず、調査者と調査対象者の間の相互作用の場の中に見出されるものであるとする見方もある [Coleman and Collins 2006]。本プロジェクトにおいても、調査者と調査対象者がともに新型コロナウイルスの感染拡大という事態に巻き込まれ、対話を通じてその状況を振り返り、確認し、協働的に言語化してきたことは、極めてエスノグラフィー的な実践であったと考えている。

## II 調査の背景と概要

2020年3月に、筑波大学人文社会系に所属する文化人類学者の木村が、学内でかねてよりさまざまな共同研究を実施していたチームのメンバーらに対し<sup>4)</sup>、新型コロナウイルスへの医療者の対応に関する調査の提案を持ちかけたことが、このプロジェクトの発端であった。外

3) なお、後述するように本稿で取り上げるプロジェクトは人類学者と医療者の計10名で実施したもので、その意味で従来個人で行うことの多い人類学的研究とは異なる部分もある。が、こうしたチームエスノグラフィーの特性や課題については別の機会に発表することとし、本稿は「デジタルプラットフォームを用いたエスノグラフィー」であるがゆえに表出した点に特に焦点を当てるものであることをお断りしておく。

4) 本プロジェクト発足以前のこのチームでの活動については木村ら [2020] を参照されたい。

出自粛などによってフィールドワークというかたちでの調査は既に困難になりつつある中で、日々刻々と変化する医療現場の状況を何らかの形で「ドキュメンテーション」できないか、ということで、当初より全面的にオンラインで実施するプロジェクトとして発案された。これを受け、共同研究チームのメンバーであった筑波大学所属の医療者の春田、後藤、小曾根と文化人類学者の照山、そして他大学などから医療者の金子、宮地と文化人類学者の飯田、堀口、濱を加えて10名のプロジェクトチームが発足した。5名の医療者と5名の文化人類学者による学際的なチームである。なお、他大学などから参加している5名は筑波大学のメンバーのうちの少なくとも一人の直接の知人だが、10名全員がお互いに直接対面したことがあるわけではない。調査の開始にあたり、春田が日本プライマリ・ケア連合学会より研究助成金を得て、プロジェクトが開始された<sup>5)</sup>。

調査の対象者として、日本国内のさまざまな地域の最前線で新型コロナウイルスの診断と治療にあたる日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医あるいはプライマリ・ケア医ら10名に調査協力を依頼した。プロジェクトの開始当初に春田が主導するかたちで、診療地域や病院の規模などを勘案して目的的サンプリングを実施して、このうち8名に調査協力依頼をし、残りは調査が進む中で主に人類学者側から「世代や性別に偏りがある」との指摘があり（全員30-40代の男性であった）、新たに女性2名に依頼したという経緯がある。

調査は、プロジェクトチームの中からインタビューワーとして1-3名の医療者と1-2名の人類学者が混在する小グループを編成し、Zoomを用いて対象者となるプライマリ・ケア医の個別のインタビューを数か月間にわたって複数回実施することで、各地域の各時点でのプライマリ・ケア医の語りを記録するとともに、経時的にその語りの質的变化を明らかにすることとした。インタビューの内容や進行についてある程度の一貫性を持たせるために、はじめに春田と照山でパイロットインタビューを実施し、そのビデオ録画を全員で見て、基本的な方向性を共有した。その際、あまりにインタビューワーが多いと対象者に圧迫感を与えるという懸念から、主に質問をするメインインタビューワーは医療者と人類学者各1名ずつとし、他の者はカメラを切ってノートテイクなどを行い、質問がある場合にはメインインタビューワーにZoomのチャットにて連絡して、メインインタビューワーから尋ねてもらい、ということで合意した。また、調査が進展してくるにつれてフォーカスグループインタビューを取り入れるようになり、複数名の対象者を同時にインタビューすることで、対象者同士の対話をも促進するようになっていった。8月までに10名の調査対象者に対して各3-5回、合

5) 日本プライマリ・ケア連合学会から研究助成金を受け、それに伴って倫理申請を行ったことで、調査対象者への倫理的配慮などは概ね医学領域の通例に則った。このことにより録画データの削除などについて通常人類学者が運用しているよりも厳格な制限が生じたが、こうしたデータの取り扱いについてもメンバー間でさまざまな議論が交わされ、あらためて平時に人類学者が行っているエスノグラフィを再帰的に見直すきっかけになったことを記しておきたい。

計で23回の個別インタビューとフォーカスグループインタビューを行っている。なお、すべてのインタビューは対象者の合意のもとに録画され、その録画データをもとに逐語録が作成された。

対象者は春田か、あるいはチームの他の医療者側のうちの少なくとも一人と直接の面識がある者が多かった。あまりにも近い関係性の場合、インタビューの内容に影響を与えるかもしれないという危惧から、あえてインタビューワーカーからはずれるといった判断がされる場面もあった。一方の人類学者側はいずれの対象者とも今回のプロジェクトで初めて出会っていた。もともと、対象者からすると医療者のインタビューワーカーは同業者であるために比較的安心して腹を割って話してくれる傾向もあり、人類学者らの中には特にプロジェクトの初期においてある種のハードルを感じた者も多かった。しかし、対象者ごとにインタビューワーカーを固定する担当制をとったため、半年間にわたって何度も顔を合わせるうちに、Zoomを介してではあっても「顔馴染み」のような関係性ができ、ラポールが形成されて、この問題は解消されていった。

ところで、インタビューの実施にあたってZoomを用いたことは先述の通りだが、プロジェクト全体の管理にあたっては他にもいくつかのツールを用いた。まず、メンバー間のコミュニケーションにはSlackを用い、ここでインタビューの日程調整や、成果となる論文の内容に関する日常的なやりとりを行った。今後の方向性など、同時双方向的に議論すべきことがあるときにはSlackで予定を合わせてZoomで打ち合わせをおこなった。また、インタビューの逐語録など、保存しておくデータや資料についてはDropboxの共有フォルダを利用した。さらに、詳しくは後述するが、インタビューを実施する際に対象者に出来事を想起してもらうための補助資料として、新型コロナウイルスをめぐる報道内容を時系列で整理したものを作成したが、これはメンバー間においてはGoogle Driveで共有し、誰でも更新できるようにしていた。このように、多様なツールを用途ごとに使い分けていたが、技術的にうまくいかないことや不便なこともあった。例えば、Slackで共有される情報は新しい書き込みがあるとはどんどん流れてしまうため、打ち合わせのためのZoomのURLが見つからなくなってしまうことや、重要な情報がどこにいったのかわからなくなってしまうこと、Dropboxの容量に制限があるアカウントを使っているためにファイルをアップロードできなくなってしまうことなどが報告され、都度、対策を考えて対応していった。

以下では、本プロジェクトの大きな特徴である、デジタルプラットフォームを用いたオンラインでの実施が、調査の設計、実施、データの分析のそれぞれの局面にどのような影響をもたらしたかを論じていく。

### III 考察

#### 1 調査の設計

調査の設計という観点から見ると、オンラインでの実施は効率性が高く、また異なる地域で臨床をおこなう調査対象者らに自身の経験を相対的に捉える機会を与えるという意味で大きなメリットとなった。全国のさまざまな地域で診療にあたる医師に対面インタビューを実施するには移動にあたって多大なコストと時間がかかるが、オンラインで行うことで効率的に10名もの医師に複数回インタビューを実施できた<sup>6)</sup>。また、先述の通り、プロジェクトの途中からはフォーカスグループインタビューを実施し、地理的に遠く離れた場所にいる医師らがそれぞれの置かれている状況や診療の実態などを共有することによって、自身の置かれている環境を相対的に捉えるような語りが生み出されていく様子もうかがえた。本プロジェクトの筑波大学内のメンバーでおこなっていた共同研究も全国のプライマリ・ケア医に関するものであったが、もとよりプライマリ・ケア医は地域に根差した医療を信念としており、地域住民の傾向や地理的特性、ローカルな医療・福祉資源の状況などを踏まえた、文脈依存性の高い臨床実践を行っている。本調査は、そうしたさまざまな固有性を持つ地域の医師らを遠隔で繋げることによって、地域ごとのきめ細やかな違いを明らかにするとともに、地理的隔たりを超えたプライマリ・ケア医らの共通性、すなわち臨床への姿勢や倫理観、まなざしなどを顕在化させるものでもあった。つまり、従来の調査が各地域で診療を行うプライマリ・ケア医らの個々の実践を「点」として丁寧に捉えることに長けていたとすると、オンラインでの調査はそうした「点」と「点」を結びつけ、対話を通じた相互参照性を高めるという意味で「線」を描くことに最適な方法である、ということを発見したといえる。

一方で、オンライン化では調査対象者のリクルートにおいて、従来のエスノグラフィーにあるような偶発性がない、という制約も明らかになった。従来のエスノグラフィーであれば、調査を実施している中で自然と知人が増えたり、たまたまその場に居合わせた人から話を聞く機会があったりするが、今回のようなプロジェクトではメンバーがあらかじめ知っている人しかリクルートできず、広がりや偶発性がない。結果的に特定の世代の男性医師が多く揃ったのは、対象者のサンプリングと調査依頼を主に担っていた春田の個人的人脈の特性ともいえる。また、Zoomでインタビューを実施することから、そうしたデジタル技術を利用できるような環境にあり、かつ使いこなすことができる人にしか協力を依頼できないという問題も生じる。本プロジェクトにおいては、実際に依頼しようとした人に技術的な理由から断ら

6) およそ5か月で23回という早いペースでインタビューを実施したことになるが、メンバー間の打ち合わせなどの際に「申し訳ありません、まだデータを見ていません」といった発言が多く出るなど、情報共有に求められるスピード感にメンバーがついていけなくなるような局面もあった。

れるということにはなかったが、オンラインでの調査ということを一般的に考えるときに、こうしたデジタルデバイドの問題と、それによって研究でアプローチできない層があるということとは十分勘案する必要があると思われる。

## 2 調査の実施

調査の実施にあたって、最も大きな障壁となったのは情報の限定性であった。インタビューについては本プロジェクトのメンバー全員が一定の経験を持っていたが、専らオンラインでのインタビューは対面のものとはやはり勝手が違う部分もあった。特に、「情報の少なさ」についてはメンバー間の打ち合わせの中でも（特に人類学者から）話題にあがっていた。対面であれば、相手と病院の前などで待ち合わせ、インタビューをさせてもらう部屋まで移動する間に院内を見回して施設や患者さんの様子を知ったり、相手が通りすがりの同僚などと交わす短い会話から職場の雰囲気や人間関係を察したり、相手の院内 PHS が頻繁に鳴っていることからどれほど忙しい中で時間をとってくれたのかを察知して恐縮したりする。こうした、インタビューという構造化された時間の周縁に、相手のことを知るさまざまな手があるはずなのだが、オンラインではどうしてもそうした部分が捨象される。「せめて（対象者の）先生方に病院内の写真をもらえないだろうか」といった発言が、打ち合わせの中で交わされたこともあった。

こうした情報の少なさについて共通の問題意識が生まれたためか、限られた情報から読み取れることを積極的に記録・共有しようとする傾向も、メンバー間で見られるようになっていった。「〇〇先生は前はだいぶ疲れているような表情だったけれど、今回はゆったりと落ち着いて見えた」などと、画面に映る相手の表情や服装、背景から得た情報が共有されることもあった。また、ノートテイクとなったメンバーがとったノートを読むと、話し方の特徴や笑いが起こったところ、強調されたフレーズ、くだけた表現ややりとりでも相手の気持ちや明確に読み取れるようなくだりなどが丹念に記録されている。録画データから別途、より正確な逐語録が書き起こされることを承知でとっているノートなのだが、それだからこそ、逐語録では必ずしも拾いきれない細やかな気づきが反映されている。

一方、こうした取り組みについて本稿の執筆にあたってあらためてメンバーで振り返ってみると、「情報の少なさ」は「得られる情報の質的な違い」として受け止められてもいた。対象者を取り巻く状況について調査者側が体験的に得られる情報がないぶん、状況は対象者自身の言葉で語られ、従来のフィールドワークよりもはるかに多くの情報が言語化されていた。診療所の周辺の様子、診察室と待合室の位置関係、通路の狭さ、患者のための貼り紙、患者とのやりとりなど、従来のフィールドワークでは調査者自身が見聞きしてフィールドノートの形で記述することの多くが、医師自身の目線で詳細に語られることによって、彼ら彼女ら



がどのようにそうした状況を捉えていたのかということがより克明に伝わり、ある意味では極めて濃密なデータが得られていたともいえる。

インタビューにおける Zoom の運用方法と、その影響についても述べておきたい。前述したが、インタビュー中はメインインタビューワーカーの2名以外はマイクとカメラを切ることを原則としていた。これは調査者側が大人数でいると圧迫感を与えるからという理由によるもので、カメラを切っていればそこにいるのかいないのかもはっきりせず、いわば存在感（とそれに伴う圧力）を半減させることができるだろうと想定しての措置だった。また、実際に在宅勤務中で子どもの面倒などで頻繁に席を立ったりせねばならないケースもあり、そうした場合にはカメラを切っておくことがインタビューの進行上有用だった。このような存在感の薄い傍観者とでもいうべき立場性は、対面インタビューでは確立しづらい。ほとんどの場合、調査者はそこにいるか／いないかの二つに一つであり、いる場合には自身のふるまいや存在感、発話は常に相手の反応や受け答えに影響を与え続け、インタビューの語りはその相互行為の中で紡がれていくことが、社会調査の方法論として指摘されてきた [山田 2003; 桜井 2002]。カメラを切るということは、こうした相互行為の回路を一方向的に断ち切りつつも、本来そこにいる者にしか経験されないはずの語りの「いま・ここ」を享受できる技術的な仕組みだと言えるだろう。

一方で、こうしたインタビューの「いま・ここ」という時空間の固有性もまた、従来の対面インタビューに比べて本プロジェクトでは希薄であった。というのも、Zoom でインタビューをおこなったあと、その録画データは研究倫理規定に照らして削除されるまでの一定期間、すべてのメンバー間で共有されており、インタビューに参加していなかったメンバーもその様子をほとんど同時に参加しているかのように追体験することができたのだ。一般的な対面インタビューでは、そもそも（エスノメソドロジーなどの場合を除いては）録画はしないし、したとしても、実際にその場にいた人が見聞きしたすべての言語的・非言語的情報を記録におさめることはカメラの角度や視線の違いによって困難だが、Zoom の録画であれば、リアルタイムで参加していたメンバーとまったく同じ体験をあとからすることができる。これは本プロジェクトのように大人数の調査者が関わる研究においては、メンバー間の経験と情報の共有度合いを各段に向上させるという意味で、大きなメリットであるといえる。

このように、調査者側にとっては Zoom でのインタビューにはさまざまな利便性もあるが、これらは同時に、調査対象者らにとってはリスクや脅威にもなりうる。カメラを切ってインタビューの場にいるということは、あらかじめ十分な信頼関係と理解がなければ、調査対象者を一方的に「まなざされる側」に置き、非対称的な関係性の中で自己開示を求めることにもつながっていく。また、Zoom の録画データは、従来型のインタビューにおける音声データよりもはるかに多くの情報を含んでおり、取り扱いに十分な配慮が求められる。何よりも

こうした Zoom におけるインタビューは、文化人類学をはじめとする社会科学の諸分野がこれまで議論を重ねて精緻化してきた、調査者と調査対象者の関係性の形成や立場性の設定などの問題に、新たな課題をもたらすもののように思われる。

### 3 データの分析

得られたデータの分析については現在も進行中だが、これまでの経過において、おそらく本プロジェクトがオンラインで実施されたことと無関係とは思えないいくつかの特筆すべき点を挙げておきたい。

まず、調査がはじまってほどなくして、先述したようにインタビューの際の補助資料として新型コロナウイルスに関する報道内容などを時系列でまとめたスプレッドシートが作られ、Google Drive で共有されたのだが、プロジェクトメンバーの間で誰からともなくはじまったのが、このスプレッドシートに自身の生活の中で起こったことを書き足していく、ということだった。例えば、「4月9日」という日付の横には、「感染者 6000 人超え。初診からオンライン診療が可能になる通達ができる」という報道内容が記載されているが、そのまま画面を横にスクロールしていくと、メンバーがそれぞれ自身の列をシート内に作成して、各人のこの日の出来事や所感を書いている。「このころ、上の子の同学年の子のタイムカードをチラ見して調べたところ、登園率は約半数。来るの・休むのはいつも同じ子」「大学の初診患者が減っていて研修医の経験症例が減っている一方、コロナを病院に持ち込まない強固な姿勢を考えると、教育目的に 1 人の患者に複数の医師がゆっくり関わる方式はそぐわないと考え、教授に意見を述べる」「研究大会のオンライン化について一般告知」「父親が隣駅のクリニックに予約通りに通院。あらかじめ電話してから行ったほうがいいのか、と言ったけど何もせずに行く。熱のある人はお断りと書いてあったし離れて座っていたし、医者は大丈夫でしょうって言ってたから大丈夫だと思う、と安心した様子で帰宅」「1 限に異文化理解の講義。この段階では 150 人あまりが登録。学生は 1 つおきに座ることに慣れている。前半に少しだけコロナの話をし、感染症の歴史や未知の他者に対する差別などについて話す。また Google form でアンケートをとったところ、5%は自宅に Wifi なし、3 分の 1 は PC なし」「母が、『日赤病院の看護師』と名乗る人からのコロナ感染予防に関するチェーンメールを送ってくる。こういうの信用しちやダメだよ！と伝える」。このような具合である。調査をはじめ前の日付については思い出せることが書かれ、それ以降の日付については時々まとまった形で更新されている。間が空いたり、あまり更新しなくなったりするメンバーがいながらも、ゆるやかに現在まで続いている。当然、調査対象者にはこれらの記述を見せておらず、あくまでもメンバー内で共有するにとどまっている。

これが何を目的とした記述なのか、プロジェクトメンバー同士で表立って話し合ったこと

はない。こういったことを始めようと明確に合意したこともなければ、当初想定していた分析の方法の中にこうした実践が組み込まれていたわけでもなく、自然発生的に始まったことである。しかし、メンバーの多くも在宅勤務を余儀なくされるなどして、本来地理的に隔たっているはずの「フィールド」と「ホーム」の境界が曖昧となっていた中で、調査する者とされる者、データを収集する場とその成果をアウトプットする場といった、本来明確に区分される立場や空間が渾然一体となっている状況に向き合うための、一つの自己再帰的な実践だったともいえるだろう。従来のフィールドワークにおけるフィールドノートのように、調査のさまざまな局面で自身が何をし、そのときに何を考えていたのか、どのような状況下で、どのような気持ちでインタビューにあたっていたのかを記録する場としてこのスプレッドシートが機能していたことで、メンバーらは自身が日常生活で経験していることとインタビューで見聞きしたとの間を取り結ぼうとしていたのだと考えられる。日々の暮らしがインタビューでの問いかけにどのように影響を与え、インタビューで知れたことが自身の暮らしにどう還元されていくのかを可視化させることで、先に述べたように、本プロジェクトのインタビューを生きられた経験に裏付けられたエスノグラフィーとして、立体感をもって立ち上がらせるための実践であったと捉えられる。実際、メンバー間でインタビューの振り返りを行う際に、他のメンバーがスプレッドシートで記述した内容はしばしば引き合いに出され、各インタビューで語られたことを解釈したり文脈づけたりするための手がかりとして用いられた。スプレッドシートの個々の記述は断片的な日常のエピソードに過ぎないが、集合体としてのこれらの記述は、インタビューの語りの背景にある社会状況とその変化をより豊かに想起し、語りを文脈づけるための装置として活用されていたといえる。

本プロジェクトで得られたデータの分析にあたっては、木村が主導するかたちで、語られた内容をテーマごと・語り手ごとにわけて逐語録を切片化して一次的な整理をおこなっている。また、成果発信の場として、さしあたっては二度にわたるオンライン・シンポジウムの開催と研究成果の執筆などを計画・実施しており、整理したデータからどのように成果をまとめ上げることができるのかを試行錯誤している段階にある。調査の計画から実施までのスピード感に比して、分析から記述、発信に至るプロセスでは勢いが鈍っているように感じられるが、その一因としておそらく、誰に向けて何を発信するのかというアウトプットのイメージは研究者間で齟齬が出やすく、特に学際的なチームにおいてはそうした方向性の違いが顕在化しやすいことからくる手探り感もあろうと考えられる。とりわけオンラインにおいては、膝を突き合わせてじっくりとデータと向き合いながら皆で意見を戦わせるというオープンエンドな討議を行いつらく感じられる。対面の場合、同じ空間・時間において、メンバーの熱量を肌で感じながら、構造化されない議論の渦に否応なく取り込まれていくようなディスカッションがあるが、そうした場づくりがなかなかできず、結果的に、分業体制での分析が進ん

でいる現状がある。しかし一方では、春田が執筆している論文に対してメンバーらが何度も非常に丁寧に時間をかけた加筆修正や校正を行うなど、対面で一斉にはできないようなアウトプットの高度な精査がなされているということも特筆すべきことである。得られたデータを分析し、論文の骨子を立ち上げるという作業が、膝を突き合せた熱のこもった議論の中でなされるものだということのもまた一つの幻想で、デジタルプラットフォームを用いた今回のようなプロジェクトの実践を通して見直されていくプロセスなのかもしれない。

## おわりに

新型コロナウイルスの感染拡大とともに広く流通するようになった「ソーシャルディスタンス」という概念は、人と人との関わり方を変えるだけでなく、その上に成り立っていた研究活動にも大きな影響を与えている。とりわけ、人と出会い、ともに時間を過ごし、対話を重ねることを調査の核としてきたエスノグラフィーにとっては、方法論を根底から揺るがす事態と言っても過言ではない。本プロジェクトは、そうした状況下で代替手段としてデジタルプラットフォームを活用しつつインタビュー調査を実施した。本稿で論じてきたように、今回の調査には確かにさまざまな制約や困難があったが、同時に従来型のフィールドワークでは意識されてこなかった気づきや、新しい方法論的転回に向けた萌芽ともいえるような発見もあった。調査者には、限られた情報を余すことなく拾いあげるために、より研ぎ澄まされた観察眼とともに、時間的・空間的に分断された語りをさまざまな文脈に再配置するためのより注意深い分析と解釈の力量が求められている。さらに、調査者の立場性・自己再帰性や調査対象者との関係性に関しても、これまでの議論を踏まえて方法論を更新していく必要性が認められた。本稿で提示した方法論が、「本来の手段」に対する「代替手段」としてだけでなく、現状を描き出す新たなツールの一つとして鍛えられていけないだろうか。

2020年9月現在、国内の新型コロナウイルスの感染拡大はいったんは落ち着いているようにも見えるが、今後どこまで長期化するのかは読めない状況が続いている。ソーシャルディスタンスをエスノグラフィーにとっての「不自由さ」として捉えるのではなく、これまでのエスノグラフィーの在り方を問い直し、人々の変わりゆく生活スタイルに柔軟に適應しうる調査法へと更改していくための契機と捉える必要があるのではないだろうか。本稿が、そうした潮流に一石を投じるものとなれば幸いである。

参 考 文 献

Boellstorff, Tom

2015 *Coming of Age in Second Life: An Anthropologist Explores the Virtually Human*,  
NJ: Princeton University Press.

Boyd, Danah

2014 *It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens*, New Haven: Yale University  
Press.

Coleman, Simon and Peter Collins

2006 *Locating the Field: Space, Place and Context in Anthropology*, Oxford: Berg.

Fine, Gary Alan and Corey Abramson

2020 Ethnography in the Time of COVID-19, *ASA Footnotes* 48(3): 8-9.

Forsey, Gerald M.

2010 Ethnography as Participant Listening, *Ethnography* 11(4): 558-572.

Hine, Christine

2000 *Virtual Ethnography*, London: Sage.

2015 *Ethnography for the Internet: Embedded, Embodied and Everyday*, London:  
Bloomsbury.

Horst, Heather A. and Daniel Miller

2012 *Digital Anthropology*, New York: Routledge.

Kozinets, Robert V.

2015 *Netnography: Redefined*, London: Sage.

Lupton, Deborah

2020 "Doing Fieldwork in a Pandemic." Accessed on October 11, 2020.

[https://nwssdtpacuk.files.wordpress.com/2020/04/doing-fieldwork-in-a-pandemic2-  
google-docs.pdf](https://nwssdtpacuk.files.wordpress.com/2020/04/doing-fieldwork-in-a-pandemic2-google-docs.pdf)

Miller, Daniel

2020 "How to Conduct an Ethnography during Social Isolation." Accessed on October  
11, 2020.

<https://www.youtube.com/watch?v=NSiTrYB-0so>

Parry, Marc

2020 "As Coronavirus Spreads, Universities Stall Their Research to Keep Human  
Subjects Safe." March 18. Chronicle of Higher Education. Accessed on October 11,

2020.

<https://www.chronicle.com/article/as-coronavirus-spreads-universities-stall-their-research-to-keep-human-subjects-safe/>

Tedlock, Barbara

1991 From Participant Observation to the Observation of Participation: The Emergence of Narrative Ethnography, *Journal of Anthropological Research* 47(1): 69-94.

小川さやか

2019 「SNS で紡がれる集合的なオートエスノグラフィ」『文化人類学』84 (2) : 172-190.

木村周平・春田淳志・照山絢子・後藤亮平

2020 「医療者と文化人類学者の協働の試み——筑波での経験の報告」『歴史人類』48: 45-65.

木村忠正

2018 『ハイブリッド・エスノグラフィー——NC 研究の質的方法と実践』東京：新曜社.

桜井厚

2002 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』東京：せりか書房.

山田富秋

2003 「相互行為過程としての社会調査」『社会学評論』53 (4) : 579-593.